

近江の古墳時代後期群集墳

古墳時代も後期に入ると、県下全域において群集墳の築造がはじまる。集落の背後の裏山やお宮さんの森の中、田んぼの中の残された雑木林には必ずといってよいほど小さな土饅頭をした少し石室をうかがわせる後期古墳が散見される。

これら後期古墳が群集して古墳群を形成している場合を特に後期群集墳と呼んでいる。時には数百基、あるいは数十基が群をなし、小さな群でも十数基、数基の単位で築かれている。全国12万6千基の古墳総数のうちその九割を占めるものがこれら群集墳であるといわれている。

一般に古墳は首長墓と呼ばれ、貴族、豪族の墳墓とされてきたが、それにしてはあまり

にも多くの古墳が小平野、小地域ごとに営まれている。このことから、そこに葬られた人人は、豪族や貴族ではなく、当時経済力を貯えつつあった有力な古代家族の長(家父長)ではなかったかと考えられるようになってきた。

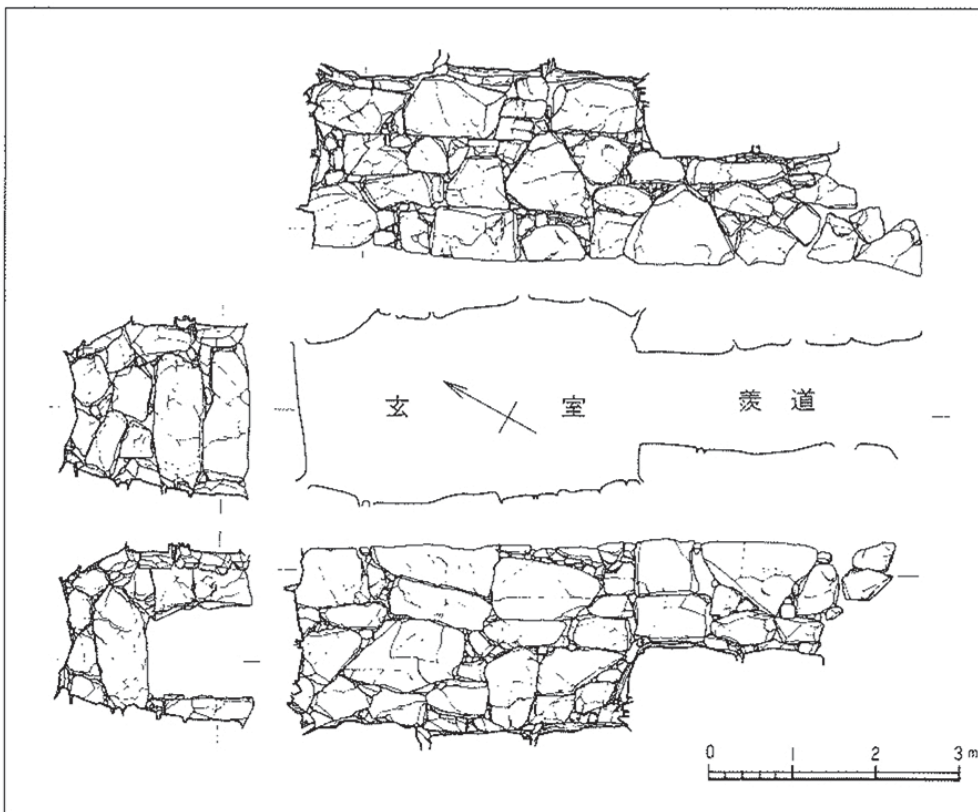
以下県下各地のいくつかの著名な群集墳の様相にふれつつ、当時の社会情勢の一端を探ってみよう。

弥生時代に続く古墳時代は、一般にその古墳の様相から前期、中期、後期の三期に区分されている。そして群集墳の時代である後期古墳の時代は西日本においてはおよそ西暦紀元500年前後から始まり645年の大化改新頃まで続くが、そのなかでも後期群集墳の盛行期は六世紀中葉から七世紀前葉頃までの7～

80年たらずの間である。

『日本書紀』にみえる天皇年紀でいえば、継体天皇の末年から推古天皇の末年頃にかけての数世代の間に該当するといえよう。

このころ、これまでの竪穴式石室や粘土槨などの葬法(埋葬施設)にとってかわって、朝鮮半島からもたらされた横穴式石室が全国的に採用されるにいたった。横に開口部をもち、被葬者(死者)を順次葬ることができる石室の採用は、当時の人々



長方形箱型の通有の横穴式石室(八日市市八幡社古墳第1号石室実測図)

1986. 2. 28

の他界観（死後の世界観、黄泉国の思想）をも一変させたらしく、副葬品においても大きな変化が生じた。これまでの鏡や装身具類（特に腕飾類）、甲冑などの呪術的、権威的なものが姿を消し、きわめて世俗的な須恵器（硬質の容器）が新しい葬送の風習にともなうものとして多量に副葬されはじめた。また、個別の群集墳によってそれぞれ違いはあるが、

死者の身辺を飾るものとして新たに金属製耳環が出現する一方、鉄鏃や刀剣、馬具、工具など前代からの副葬品もまだ少量ながらみうけられた。

しかし、古墳は従来の巨大な前方後円墳、円墳に比べてきわめて小規模で、不定形なものとなり、石室を覆うことさえできれば、さほど厳密でなくともよかったのかと思わせる



木棺直葬墳（日野町小御門古墳群）

ほどの径10m前後の小円墳が大多数を占めることになった。

これら古墳の被葬者数（葬られた人々）も、前代までは1～2名程度でまれに数名前後にすぎなかったものが、この時代に入ると少なくとも数名～十数名が順次石室内に葬られることになった。被葬者が石室内に入りきらない場合には、骨を集めたり、石室外にかき出した場合すら多々みうけられる。

米原町枝折の塚原古墳群では、横穴式石室が石灰岩の石材で築かれていたため人骨の残りがきわめてよく、2号墳では6回にわたって葬られた合計7体分の人骨が検出された。このように死者を順次石室に埋葬することを追葬と呼んでいるが、後期群集墳の一つの特徴といえる。しかも7名中女性がわずかに1名であることやその女性が男性と対になって葬られていることから、郷戸主（家族の長）とその妻が中心的な被葬者で郷戸主と兄弟関係、あるいは伯父にあたるような房戸主が前後して追葬

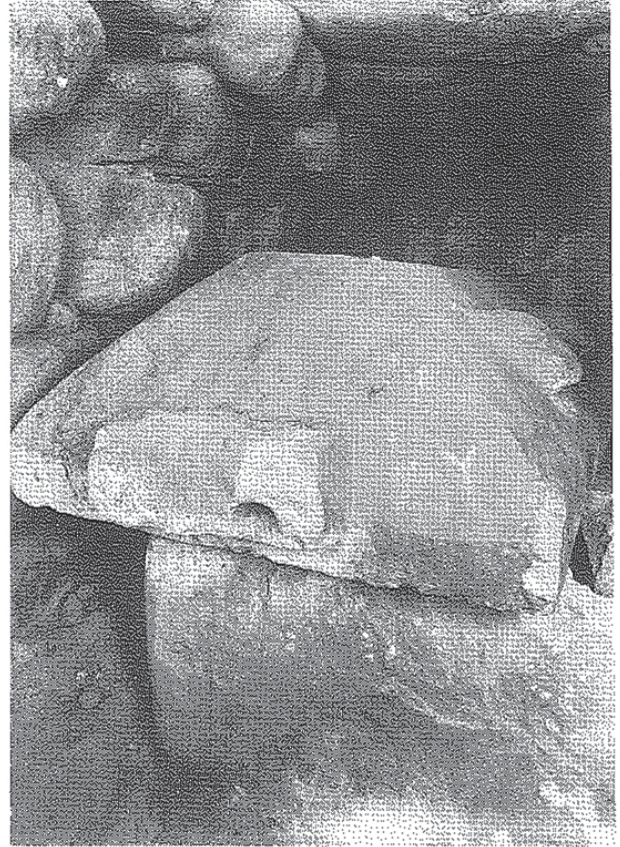


火化墓（日野町小御門古墳群）

されたものとも考えられる。

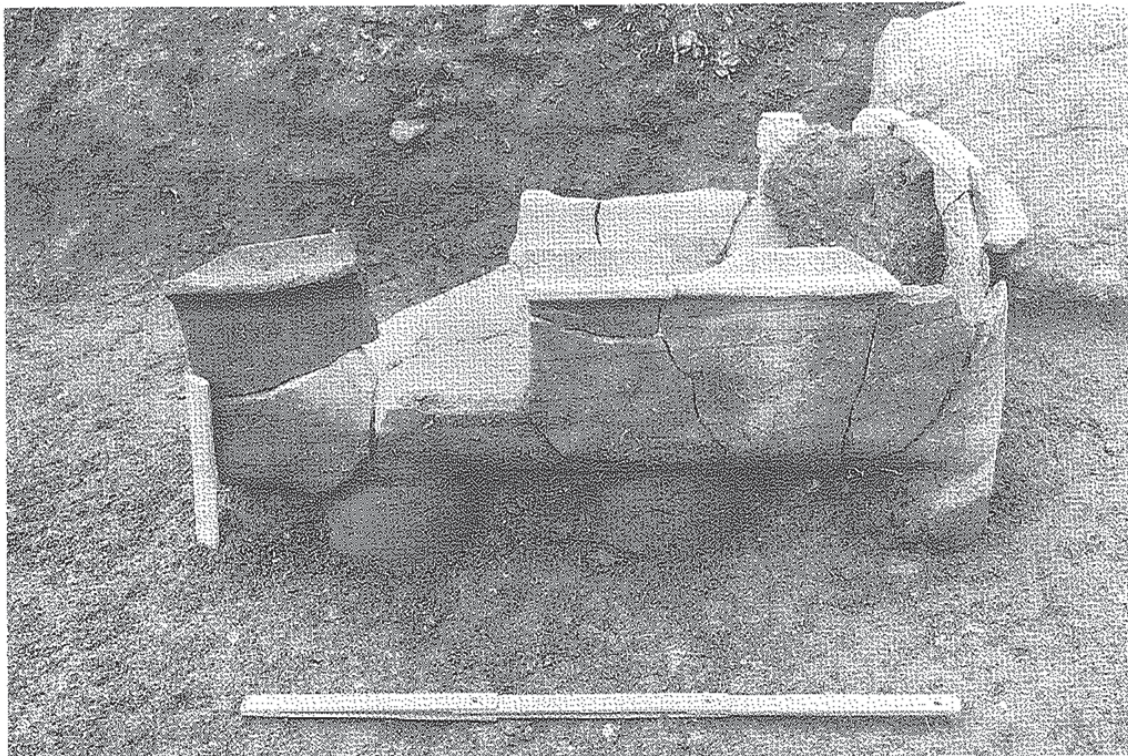
当時の家族構成は現在の単婚家族と異なり、低い生産力のために自立できず共同体的な要素の強いものであった。古代家族は房戸がいくつかあつまって郷戸を形成し、その構成人員も数十人前後が一般的ではなかったかと思われる。しかも、このような郷戸の頂点に立つ郷戸主は世帯共同体とも呼ばれるこの古代家族の家父長として個別的な農業経営を切りまわし、経済力を身につけながら自立を遂げつつあったのである。このような有力な世帯共同体の郷戸主を家父長制的世帯共同体の家父長と呼び、いままで述べてきた後期群集墳の広範な築造の背景にはこのような家父長層の広範な抬頭があったからであろうと考えられている。

しかし、後期群集墳は、その分布の偏りからみても、当時の有力な世帯共同体の家父長なら誰でもが築きえたものではなかったようである。大和政権下に組み込まれ、カバネ（姓）身分を与えられた官人層・農民集団・技術集団など大王（天皇）の私の民となった家父長層に限られていたようである。



石 棺（野洲町甲山古墳）

このため群集墳の詳細な解明は、大和政権の権力機構やその広がり、また当時の有力な古代家族の実体やイデオロギーを考えるうえに貴重な資料といえよう。



陶棺出土状況（大津市若松神社境内古墳）

なお、県内には横穴式石室をもつ群集墳のほかに少数ではあるが木棺を墳丘に直接収めた木棺直葬墳（日野町小御門、蒲生町飯道塚両古墳群など）や横穴式木室墳あるいはこの木室に直接

火をかけたもの（日野町小御門古墳群）などがあり、埋葬棺にも石棺（野洲町甲山、円山両古墳、群集墳中では滋賀里百穴の古墳群中など）や木棺、陶棺（大津市若松神社古墳ほか）、箱式棺（野洲町宮山古墳）などがある。しかし、丘陵の山腹などに横から素掘りの穴を穿って墓室を設けた横穴は現在のところ県下には1例も知られていない。

県内の著名な群集墳を一瞥すると、そこには安土町竜石山あるいは同常楽寺山、さらには日野町小御門の各古墳群などのように数基からなる群集墳や、竜王町三ツ山、蒲生町飯道塚両古墳群などのように十数基からなるものがあり、八日市市平石や滋賀里百穴のように数十基前後からなる群集墳も存在する。さらに、堅田春日山古墳群や秦荘町金剛寺野古墳群では200基以上を数える大規模なものがあり、そして大津市北郊の穴太や滋賀里大谷、同大通寺ではおそらく埋没しているものを加えると一群平均300基前後の一大群集墳地帯であったと推定される。

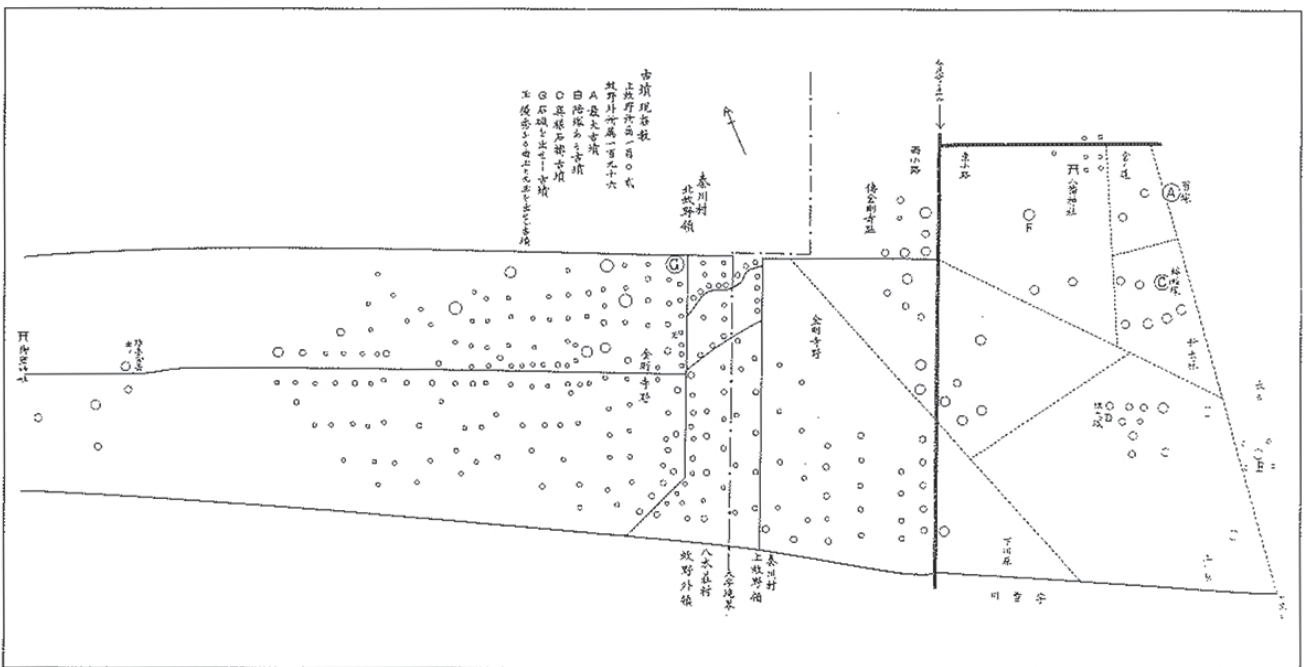
しかし、このような大小さまざまな群集墳も、基本的には大和政権の足下に組込まれた有力な古代家族によって築かれたものであり、群集墳の前面平地に広がる集落の生産の豊か

さや集落をこえての擬制的な同族的氏族集団の大きさなどによって群集墳の規模の大小も決定付けられたといえよう。

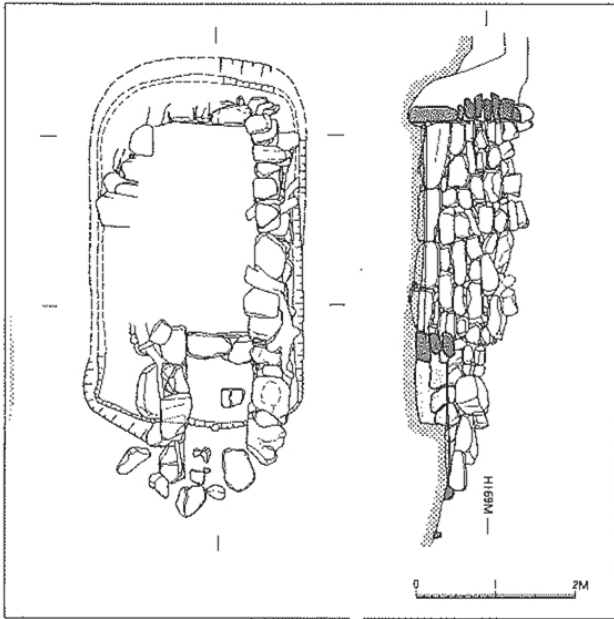
たとえば298基からなる秦荘町金剛寺野古墳群では、秦氏一族として擬制的同族関係を結び大和政権の財政的な基盤をなしたとされる依智秦、秦公、秦人等々の各支族が一つの墓域を共有したことが想定されるし、大津穴太や滋賀里大谷等の古墳群ではのちに志賀忌寸として同族関係を示した穴太村主や大友村主などがやはり大和政権につかえた官人層としてこれらの群集墳を築いたと想定されよう。この場合、穴太や大友氏など県下全域に分布していたこの氏族は渡来系氏族・志賀氏として、当時この大津市北郊の定められた墓域へ葬られたとみてよからう。

このため、たとえ数十基、数百基からなる大規模な群集墳も、およそ数世代の間に重層的に築かれたものであるため群を大支群、中支群、小支群の3支群に分けることによって群を形成してきた有力古代家族の家族数や集落規模さえ把握できるといえよう。

たとえば215基からなる大津市堅田春日山古墳群では6つの大支群のほかに中支群や小支群の存在が明らかであるが、まずこの春日



秦荘町金剛寺野古墳群（近江愛智郡志第一巻より）



縦穴系横口式石室（秦荘町金剛寺野古墳群中上蚊野5号墳）

山古墳群は氏族的な擬制的同族関係を示すカバネ集団—春日部、和邇部などが被葬者として想定され、数十基単位の大支群は、平野部での集落規模と集落数を示すものといえる。また、十数基からなる中支群は生産活動における協同の労働単位、数基ごとからなる小支群は一家族の数世代にわたる墓域を示すものといえる。

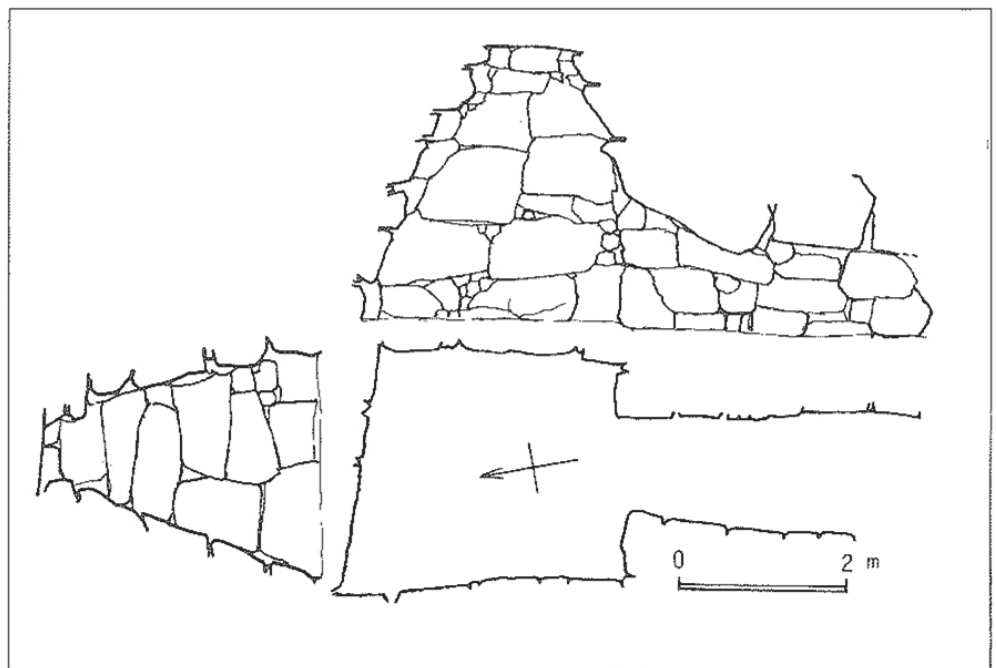
他方、各地域の群集墳に築かれた横穴式石室についても、各氏族の経済的、文化的な基盤の相違により石室構造・形式の異なる場合がみうけられる。

たとえば先に秦氏一族の墳墓としてのべた金剛寺野古墳群では、横穴式石室の主室である玄室の通路部分にあたる羨道との境に境石が置かれ、羨道床面が玄室の床面より一段高く、時には外上方へ傾斜しているのである。おそらく羨道の天井石もまた玄門から羨門方向に向かって一石ずつ高くなり羨道の床面の

傾斜に対応していたものとみうけられる。このような石室を用いた氏族こそ秦氏と擬制的な同族関係を結んでいた湖東一円の渡来系氏族ではなかったかと思われる。しかも、この渡来人の故地は、その石室構造に類似したものがあることから朝鮮半島南部の達城地域ではないかと推定されている。

また、大津市北郊（穴太、滋賀里など）の横穴式石室の構造は、玄室の平面が正方形に近く、立面では石材の前面への持送りが著しい。しかも玄室の天井石は一石しかなく、正方形プラン穹隆頂持送式天井石一石墳と呼ばれる。さらに、その副葬品には他の地域ではほとんどみることのできない甕、釜、甑でセットとなった炊飯具のミニチュアが必ずといってよい程みうけられる。このような炊飯具の出土は、死者が黄泉戸喫とよばれる黄泉國の食物を食する儀礼を行っていたことを示しており、このような他界の食を口にすることによって、はじめて死者の世界に属することができると考えられていたのであろう。

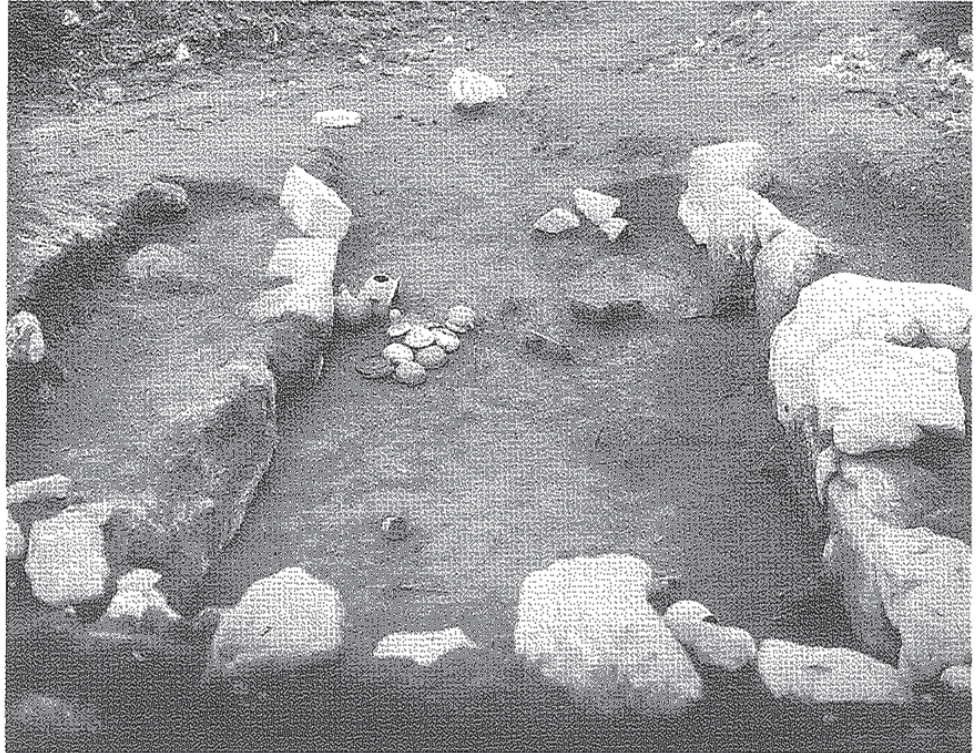
同様な炊飯具のミニチュアセットは畿内とその周辺部で2～3出土する地域があるが、他には遠く朝鮮半島北部の古墳で形の異なる炊飯具ミニチュアセットの出土が知られてい



正方形プラン持送式天井石一石墳（大津市塚穴古墳）

る。このため大津市北郊の特異な横穴式石室の構造と照らし合わせて、その被葬者である志賀忌寸が、遠く中国大陸に起源をもつ百済からの渡来者集団ではなかったかと推定されている。

しかし、このような各氏族に対応するかと思える地域色豊かな特異な石室も、七世紀・推古期に入るとその様相が一変する。早々に群集墳の築造を終える集団や、狐栗古墳群の



ミニチュア炊飯具の出土状況（大津市穴太飼込古墳）

ように追葬の可能な横穴式石室から一人用の小石室や木棺直葬に変化し、1～2名しか葬られなくなる地域が現われはじめる。

推古期における官位の制定等が古墳築造とは異質な身分の表示方法として出現してきたため、古墳の築造による権力や身分の誇示などが不必要になったといわれている。

古代国家成立過程の諸段階にともなう官僚

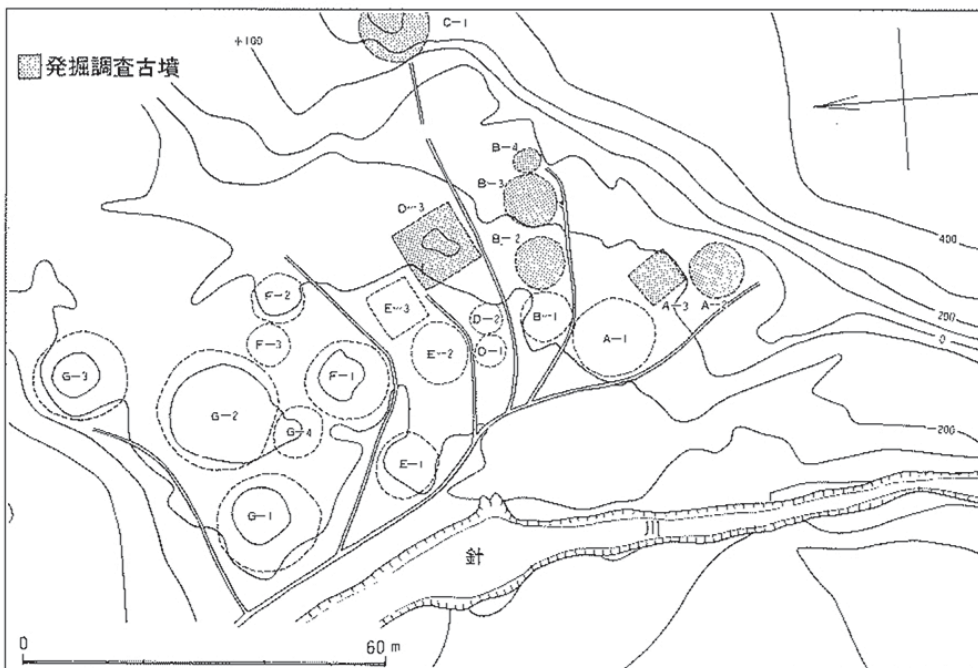
制的身分秩序の発展段階に対応しつつ群集墳もまた消滅に向かったのである。

なお、後期群集墳と視覚的に類似した分布形態をとるものに弥生時代の方形周溝墓群や古墳時代中期のプレ群集墳と呼ばれるものがある。前者は周溝の溝を隣接した周溝墓と共有し、連結状態で営まれている。

後者の場合には数基あるいは十数基からなる

支群が、数世代にわたって順次築かれたというようものではなく、一時期一度に若干相前後しながらも複数の古代家族の家父長が一墓域を営んだものであり、後期群集墳の時代と異なり家族単位の墓域がまだ設定されていなかった時期として明確に区別できるものといえよう。

（丸山竜平氏提供）



古墳群の構成（甲西町狐栗古墳群）